
秘封倶楽部活動記録

夜鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘封倶楽部活動記録

【Nコード】

N8669M

【作者名】

夜鷹

【あらすじ】

秘封倶楽部

京都のとある大学にある非公式のオカルトサークルである。

メンバーは宇佐見蓮子とマエリベリー・ハーンの二人。

そして4月。新入生も入ってきて、他のサークルは新入生勧誘に躍起になる中、彼女達は全く動かなかった。

そんな中、迷い込んだ新入生が一人。

秘封倶楽部の新たな物語が始まろうとしていた。

第一話：始まり（前書き）

この作品は世にも珍しい秘封倶楽部とオリキャラのお話です。

この作品にはオリキャラが登場します。苦手な方は戻ってください。

また、この作品は資料の少ないなか書いています。独自の解釈なども多々あります。ご注意ください。

そして、この作品は作者の気まぐれで投稿されます。ご注意ください
い。

第一話：始まり

注意！この作品には一応オリキャラらしきものが出ます。そういうのが、嫌いな人は、すぐに戻ってください。

気にしない方は、体調に気をつけながら、読み進めてください。

「嘘……嘘じゃない！受かった！」

桜の花が咲き始める季節。どうやら、私にもなんとか桜が咲いたようだった。私は嬉しさのあまりに、その場に泣き崩れてしまった。この後、私になにしてたか、はっきりとは覚えていない。気がついたら、お母さんと家で抱き合っていた。

くくく

「あ、あれ？ここ……どこ？」

えーと……私は……入学式の後、構内を歩いてたら、サークルの勧誘の人達に囲まれて……そうだ、その人達から、逃げて……そして、迷ったんだ……

「どうしよう……ん？あつ、紅茶の良い匂い……」

私は紅茶の匂いに誘われて、ふらふらとさらに奥へ歩いて行った。

~~~~~

「ここだ……秘封……倶楽部……？ここもサークルなのかな？」

他のサークルには入ろうとも、思わなかったのに、ここには何か惹かれる。扉から目が離せない。そんな不思議な魅力があるが、どこか恐ろしいような気もしないでもなかった。

「よし……失礼しまーす」

私は一度気合いを入れ、扉をノックして、恐る恐る入っていった。

部屋の中には二人の人がいた。一人は山高帽に似た帽子を被った茶髪の女性。もう一人は、不思議な形の帽子を被った金髪の女性。

「あら、いらっしやい。道にでも迷ったの？新入生さん」

金髪の女性が、私にそう聞いてきた。

「どうして、私が新入生だと……」

「簡単よ。ここら辺は殆ど人が来ないの。特に、ここには。来るのは、道に迷った新入生くらいね」

金髪の女性の言葉に、少しすごいと思った。

「あの……秘封倶楽部って何やってるサークル何ですか？」

「簡単に言うと、オカルトサークルかな。普通のオカルトサークルみたいに霊能活動は……したことあった？」

茶髪の女性はそう聞いて、ない。と金髪の女性が応えた。

「まあ、所謂不良サークルかしら」

この時だ。この時私は『何か面白い事がある』と直感的に感じ取った。

「せっかく来たんだから、お茶でも、飲む？」

金髪の女性はカップにお茶を注ぎ始め、茶髪の女性は皿にクッキーを出して、一枚口に加えた。

「私を……私をここに入れてください！」

「えっ？」

茶髪の女の子は口にクッキーを加えたまま、金髪の女の子はティーカップに紅茶を注ぎながら、固まった。

くくく

あとがき

どうも、ナイトホークです。

今作は昔から長編用にとっておいたネタを突発的に書いたものです。

これはまだ未完成何ですけどね。元々オリキャラと絡ませるつもりだったのですが、設定も何も作ってないわけです。だから、『私』としか、出ていない。

蓮メリとオリキャラ絡ませてるのって少くないか？と思って、去年くらいに思いつきました。そして今、その難しさに気づいた。

これが、続くのか？今後どうなるか？全く考えていません。

まあ、その1とは書いたが、続かないな。オリキャラ考えんのめんどくさいし

オリキャラいる作品は読みたくないでしょ？

## 第二話：入部？

「私をここに入れてください！」

「「えっ」「」

二人は固まった。当然紅茶を注いでる途中なので、もうティーカップから溢れている。

「あっ！メリー！お茶！溢れてる！」

「えっ？ああっ！蓮子！拭くもの！新入生さん！資料濡らさないようにして！」

私は言われた通りにテーブルに置いてあった本やプリントを持ち上げて、濡れるのを回避させた。

〈少女掃除中〉

「えーと……見苦しいとこ見られちゃったわね……」

メリー先輩はそう良いながら、頬を搔いた。

「私達も入りたいてって言う人は初めてだから、ちょっと動揺しちゃって……」

「あなたが、入りたいてって言うなら、部長の私が許可するわ。秘封倶楽部は来るもの拒まないのよ！」

蓮子先輩はドンと胸を叩いた。

「あなたいつから部長になったのよ。私はマエリベリー・ハーン。メリーで良いわ」

少し日本人離れた顔だなとは、思っていたけど、やはり外人だった。まあ、今の時代、京都の大通りに、日本人は半数しかいないと言われているから、不思議でもない。

「作った時からよ。私は宇佐美蓮子。よろしくね」

私は蓮子先輩はの差し出した手を握った。

「ありがとうございます。私は紅林です。紅林美奈です。よろしくお願ひします。メリー先輩。蓮子先輩」

「メリーで良いわよ。ねえ、蓮子」

「そうね。先輩って言われるのは、なんだかむず痒いもの。だから、今後先輩はなしね」

「……はい！」

この日の出来事は運命だったのかどうかは私にはわからない。だけど、この二人の先輩に出会えた事は、後にして思えば、運命だったのかもしれない。

~~~~~

おまけ

美（『先輩』は禁止って言われたけど、『さん』とかなら、大丈夫だよ。いきなり呼び捨てとかはさすがに……）

蓮「あっ、さんもなしね」

美「えっ」

メ「さすがにそれは辛いんじゃない……」

第三話：初めての活動

私が秘封倶楽部に入ってしばらく経った。確かに秘封倶楽部で、靈能活動みたいな事はやった事がない。まあ、それはそれで良いのだけど。やっぱりオカルトサークルというものに入った訳だから、少しは活動したいという気持ちはある。

「失礼しまーす……」

私は部屋の扉を開けた。今日は珍しく、蓮子さんもメリーさんもいなかった。いつもは私が講義が終わって、走ってきて、本当に講義出てるの？ってくらいに必ずどちらかはいるのに。

「珍しい……ん？これは……」

私はテーブルに置いてあった古めかしい本を手にとった。

「メリーさんの忘れ物かな？何々……」 『本当は近い月の裏側 著
八雲紫』……なにこれ？」

そういえば、ちょっと前に月面旅行が日本でも出来るようになったって聞いたっけ……値段はバカにならないけど……そうになると、少しこの本が気になってきた。

「誰も……いない……よね……」

私は一度周りを見回した後、表紙に手に掛けた。

「メリーごめん！遅れた！」

蓮子さんが突然入ってきたので、私は慌てて、本を元の場所に戻した。

「って……美奈だけ？メリーは？」

「メメモメリーさんはまだ来てませんよ」

「そう……」

蓮子さんは少し残念そうに、いつもの席に座った。メリーさんがいないのがそんなに残念なのかな？少し待てば来るのに……

「蓮子ごめんなさい！話があるって言ったのに遅れちゃった」

ほら来た。蓮子さんが座ってから、一分も経たないうちに、メリーさんが入ってきた。メリーさんが座るのを確認した後、蓮子さんは写真を取り出した。

「二人とも、この写真、何か変でしょ？」

私は写真をじっくり見たけど、どこが変なのか全くわからない。ただの深い霧のかかった湖を遠くから撮った写真にしか見えない。

「あれ？美奈はわからない？」

「ええ……まったく……」

「ああ、蓮子はこの事を言いたいよね。この赤い時計塔」

そう言つて、メリーさんは写真の端っこを指差した。私はメリーさんの指先を見ると、確かにぼんやりと赤い時計塔があるのがわかる。夜中に撮られた写真だからまったく気づかなかつた。

「けどいつものが見えないわね……」

「見えないの？」

二人が謎の会話をしている。ついて行けない……私は二人の謎の会話を聞き流すしかなかつた。

「ああ、ごめんなさい。美奈には何の話かわからないわよね」

まったくその通りです。

「簡単に説明すると、私は結界の切れ目が見えるの」

「そして私は月と星が見える夜限定で時間と場所がわかるってところかな」

……

「信じられないわよね……」

「……いえ、信じます」

私は少し悩んだ後、そう応えた。

「私にはそんな不思議な力は無いけど、なんとなく嘘じゃない感じがするんです」

「そう……信じてくれて嬉しいわ。で、蓮子、出発は？」

「明日の……」

「「明日!?!」」

まさかの返答に私もメリーさんも驚くしかなかった。

「だって、思い立ったが吉日って言うでしょ。本当は今日出発したいんだけど、さすがに……って思ったから明日」

どうしよう……何にも準備してないよ……そこまでわかってたなら、もっと余裕をくださいよ……

嘆きたい気持ちもあるけど、秘封倶楽部での初の活動と聞いて、少し心を踊らせながら、私は準備の為に少し早めに帰ることにした。

第四話：いざ湖へ

「蓮子さん、遅いですね。電車間に合うんですか？」

「大丈夫。集合時間はいつも三十分の余裕をとってるの」

三十分……そんなに遅刻するんだ……

「それより、メリーさん……荷物ないんですか？」

メリーさんはバックすら持っていないかった。

「一応あるわよ。極力減らすように言ったじゃない」

そーなのかー……これでもだいぶ減らしたのに……そう言われると、押し入れからリュックを引っ張り出した労力が無駄に思えてきた……

「だいたい何を持ってきたんですか？」

「財布、ペンライト、手帳。むしろあなたが何を持ってきたのよ」

まさかの3つ……私なんか2乗しても足りない……

「言いません……メリーさんの聞いたら、私が馬鹿らしくて……」

「ごめん！遅刻した！」

うわー……蓮子さんも何も持っていない……今度から、私もそうし

よじ……

「四分七秒遅刻。じゃあ、行きましょうか」

まあ、これから楽しい旅が始まるって思えば、荷物の事なんか気にならないよね。

~~~~~

「やっとついたー」

電車、バス、徒歩の時間を合わせると、四時間半位かな。その位遠かった。私は背中荷物を投げ出して、地面にゴロンと寝たかったけど、そこはぐつとこらえて、荷物だけ下ろすことにした。私達がいるのは湖のちょっと手前。前方には深い霧がかかっている。

「やっぱり霧が深いわね」

「湖を一周してみる？」

「そうね。何か見つかるかもしれないし。見つからなかったら、見つからなかったよ」

「美奈ー置いてくよー」

ん？ああ！蓮子さんもメリーさんも、もうあんな所に！もう少しゆつくりしてくれないかな……私はリュックを背負って、急いで追いかけた。

~~~~~

「ねえ、いくら何でも霧が深すぎない？」

「メートル先を見るのも難しい。霧で見えないから、足を滑らせて、湖に滑り落ちないように気をつけないと。」

「確かに……でも、写真の時も、この位じゃなかった？」

「こんなに深くはなかった気がする……こんな状態ではぐれてしまったら、大変な事だ。」

「あっ、あっち明るいですね」

「どれどれ……本当だ……行ってみるしかないわね」

「そう言っつて、蓮子さんは私が指さしている方に歩いていく。」

「美奈も行きましょう。置いていくわよ」

そして、私の横をメリーさんが通り過ぎた。

今度は置いて行かれないように、メリーさんと一緒に歩いて行った。

霧を抜けると、目の前には文化財に指定されていそうなだいぶ古い赤いお屋敷が現れた。写真に写っていた時計塔もある。

「わぁ……本当にあった……」

私はこのお屋敷に興味津々だったけど、蓮子さんとメリーさんは少し様子が違った。なんだか、困ったような顔で二人で話していた。

「どうしたんですか？何かあったんですか？」

「ちょっとね……」

メリーさんは辺りを見回し、蓮子さんは顎に手を当てて、考え込んでいる。

「……わかった！って、遅かった……」

蓮子さんは今きた道の方を見て、絶望とまではいかないにしても、だいぶ落ち込んでしまった。

私は何かあるのか？と思って振り向いてみたら、特に何か変わった物はなかった。普通に青い空と緑の森が見えるだけだった。

「……あれ？いつの間に霧が晴れたんですか？まあ、晴れて良かったですね」

「晴れちゃ駄目だったのよ！」

「え、どういう事ですか？十文字以内でお願いします」

「霧が帰り道だったのよ」

ピッタリ十文字で返された。

「ええええええ！本当ですか？！」

「まあまあ、二人とも落ち着いて」

こんな状況でもメリーさんは落ち着いていた。どこからそんな余裕がでてくるのかを知りたい気がする。

「とりあえず、館の人に状況を話して泊めてもらえないかを聞きに行きましょう」

まあ、メリーさんの言うことは一理ある。現状を変えるためにはまず行動！そんな言葉を聞いたことがある気がする。そんなわけで、私達は赤い館に向かったのだった。

第五話：赤い館の門の前

そう時間も掛からずに、赤い館にたどり着いた。

「遠くからみても立派でしたけど、近くで見るともっと立派ですね」

「そうね……」

「二人とも感傷に浸ってないで、さっさと話をしちゃいましょう」

蓮子さんに急かされて、門の前に移動すると、少し中国風の服を着た女性が門の前に立っていた。失礼かもしれないけど、仮に「中国さん」と呼ぶことにしよう。

「ん？何か用ですか？」

私達が話しかけるより先に中国さんが笑顔で話しかけてきた。

「え、えーと……」

「私達は道に迷ってしまったんです。どうか一晩泊めていただけないでしょうか？」

メリーさんは私が言葉選びに手間取っている間に、さっさと用件を述べた。

しかし、それを聞いた中国さんの顔は少し曇った。

「大変申し訳無いのですが、ここであなた方の安全を100%保証

すると言うのはとても難しいのです。この道をずっと行くと、人里にたどり着きます。そちらは100%安全ですので、そちらをオススメします」

中国さんは館の近くにある森へと続く一本道を指差してそう言った。

「わかりました。ありがとうございます」

「二人ともストップ！」

私とメリーさんが中国さんに言われた道を進もうとした所を止められた。

「二人とも良い？ 私達は霧を抜けて来たのよ。森を通り抜けたら、霧が出てるかすらわからないじゃない」

蓮子さんは中国さんに聞こえないように小声でそう言った後、再び中国さんに話しかけた。

「すみません。やっぱりここに泊めてくれませんか？」

中国さんは困ったような顔をしていた。

「しがない門番の私がそれを決めることは出来ません。中にお通じますので、そちらは聞いてください。もう一度言いますが、安全は保証出来ません。それでもというならば、お通りください」

中国さんは門を開けた。

私は少しビビりながら、蓮子さんとメリーさんのあとを追って、門

をくぐった。

第六話：広い館の小さな鐘

どつという仕組みなのかはわからないけど、入り口の扉は私達を招き入れるように開いた。

扉が開いていると言っても、メリーさんはノックしてから中に入った。

中に数歩入った所で、扉はひとりでにしまってしまった。

「これ……本当に大丈夫なんでしょうか？」

「さあ？ほら、そうこうしている間にお手伝いさんが出てきたわよ」

銀髪のメイド服の女性がこっちに歩いてきた。この人も失礼かもしれないけど、「メイドさん」と呼ばせてもらおう。

「紅魔館へようこそ。宿泊の件ですが、お嬢様より許可は出ています。お部屋に案内いたします。ついて来てください」

私達が用件を言う前にメイドさんは「最初から知っていた」と言わんばかりだった。中国さんがトランシーバーが何かで連絡した。と、考えるのが妥当だろう。

広いエントランスを抜け、これまた広い廊下を歩いている時、蓮子さんが切り出した。

「ねえ、いつまでそんな風に知らないフリをしているの？」

「……仕事中ですので」

メイドさんはそっけなく返した。どうやら、蓮子さんとこのメイドさんは知り合いのようだ。

「こちらの三部屋を自由に使って良いという事です」

一人一部屋とは、ここのお嬢様とやらはかなりの太っ腹と見た。

「ああ、一つだけ注意があります。もし、生きて帰りたければ、無闇に出歩かないください。何かありましたら、これを鳴らしてください。すぐに駆けつけます」

私はメイドさんから小さな銀色のハンドベルを渡された。こんなので本当に聞こえるのか？と、思いながらそれをまじまじと見つめてみたり、軽く鳴らしてみたりしたが、普通のハンドベルだった。

「それでは失礼します」

メイドさんは軽くお辞儀した後、今来た廊下を戻っていった。

「とりあえず、全員真ん中の部屋に入りましょう。話はそれから」

第六話：広い館の小さな鐘（後書き）

咲夜さん秘封倶楽部のお話は、機会があれば投稿したいと思います。

第七話：異世界での禁止事項】

部屋の中はとても広く、高級ホテルのスイートルームのようだった。

「うわぁ、凄い……」

「美奈、感動するのはそこまで。荷物置いて、適当に座って」

言われた通りに荷物を部屋の隅に置いて、テーブルを囲むように座った。

「とりあえず、今わかっている事について整理しましょうか」

メリーさんがポケットから取り出したメモ帳のページを切り取って、今わかっている事を箇条書きした。

『・霧が帰り道

・無闇に出歩くと危険

・用の時はハンドベルを鳴らせば良い』

「まあ、そんなに書くこともないけどね」

「一つ良いですか？食事はどうしますか？」

「食事は出されるんじゃない？」

「そうじゃなくて、こういう別世界に行った時は、その世界の物を食べてはいけないうってよく聞きますか？」

蓮子さんもメリーさんも「あっ」と小さく呟いた。どうやら純粹に忘れていたらしい。

「だ、大丈夫よ……きっと……」

「と、とりあえず、ちゃんと理由を話して、断りましょう」

メリーさんはハンドベルを鳴らした。澄み切った良い音が部屋中に響いた。そして、ほぼ同時に、部屋のドアがノックされた。

「どうぞぞー」

メイドさんが入ってきた。このメイドさんは時間でも止められるのだろうか？

「どうかいたしましたか？」

「食事について聞きたいんですけど」

「はい。今現在、私どもが全力を持って、フルコースを準備させていただきます。よろしくお願いいたします」

断れない……

「それと、お嬢様より、ディナーをご一緒にいかが？と伝えるよう、申し使っております」

なおさら断れない……

「ありがとうございます。時間取らせてしまって、ごめんなさい」

メイドさんは軽くお辞儀をした後、部屋を出て行った。

メイドさんが出て行った後の行動は皆同じだった。ため息をすることだ。

第八話：吸血鬼の食堂

「失礼します。お食事の準備が整いました」

すっかり日も沈んで綺麗な三日月が空に登った頃に、メイドさんがそう告げに来た。

そして、案内された部屋には昔の西洋貴族の食堂にありそうな細長い横に五人ほど並べるがテーブルがあった。私が思うに、これは大人数で食べるためのテーブルであって、三、四人で食べるための物ではないと思う。

長いテーブルの上座に幼稚園生 良くて、小学校低学年 うちの女の子が座っていた。この子が『お嬢様』と呼ばれている子だろう。

「いらっしやい。私がここの当主のレミリア・スカーレットよ」

子供とは思えない威厳に圧倒されながらも、よく見てみると、レミリアちゃんを見ると、背中に悪魔のような羽が生えていた。

「羽……コスプレ？」

私が小声でそう言うと、レミリアちゃんはムツとした顔になった。

「コスプレ？ 誇り高きスカーレット家当主がコスプレ？ これは本物よ！」

レミリアちゃんは怒って、バンツ！とテーブルを叩いた。少し痛か

ったのか、若干涙目になっていた。

「私は吸血鬼なの！あなたには子供に見えるかもしれないけど、あなたの何倍も長生きしてるのよ！」

となると、レミリアちゃんではなく、レミリアさんになるのだろうか？いや、私はあくまでレミリアちゃんと呼ぼう。心の中では。

それにしても、吸血鬼という者が存在しているとは……。てっきり物語の中だけの存在だと思っていた。しかし、自称ではあるが存在を肯定する人物が目の前にいるのだから、信じないわけにはいかない。

「私としたことが……。つい、声を荒げてしまったわ……。疲れたでしょ？座ってちょうだい」

椅子に座った後、私はあることに気がつき、ゾツとしてしまった。

「蓮子さん、メリーさん……。私達は吸血鬼と食事を共にするんですよ？」

「そりゃあ、本人が吸血鬼だって言っているんだから。吸血鬼との食事なんですよ」

「よく聞いてください。私達の料理はフルコースらしいですけど、吸血鬼の食事って……」

私達ですよね。

自分で言っというてなんだが、背中が寒い。きつと蓮子さんもメリー

さんも同じなのだろう。

「あなた達……」

「は、はい！」

「悪いけど全部聞こえてるわよ。一つ聞くわ。あなた達は食事として、生きたまま家畜にかじりつく事はあるかしら？」

牛や豚に直接かじりつくなどするわけない。タダでさえ合成ではない牛肉や豚肉は高いと言うのに、一頭分の料金を払えと、なったらもはやどうしよもなくなる。

「ないわね」

「つまりはそういう事よ。私が食べるのはあなた達と同じ物よ」

つまりは私達は生きた家畜と同じという事らしい。生きた家畜はそのまま食べない。私達は安全というわけだ。安心と同時に、なんとなく悔しさがこみ上げてきた。

第九話：天然物

私達がそんなこんなしているうちに料理が運ばれてきた。しばらく見ていると、無意識で涎が垂れてきそうなほど、見た目がとても美しく、その上、おいしそうだった。

吸血鬼との食事という別の問題があったためすっかり忘れていたが、私達がこの料理を食べるわけにはいかない。

「どうしたのよ？早く食べなさいよ」

「あ、あの大変申し訳ないのですが、斯く斯く然々で、私達がこれを食べるわけにはいかないんです」

それを聞いて、レミアアちゃんは怒るだろうと、思っていたが、一瞬キョトンとした後、クスクスと笑っていた。

「あなた達面白いわね。そんなこと、気にしないで大丈夫よ。私の従者がそれを証明しているわ」

「そういえば……彼女は食事もしてたし、紅茶も煎れていたわね……」

メリーさんは何かに気づいたのか、そう呟いた後、ナイフとフォークを手にとって、料理を口に運んだ。

「……あつ、おいしい」

「当たり前でしょ。なんてったって、咲夜が作ったんだから」

レミリアちゃんは自慢気に凹凸のない胸を張って誇らしげにしていた。

「あなた達も食べてみなさいよ。おいしいわよ。天然物みたいだし隣を見てみると、既に蓮子さんは食べ始めている。私はナイフとフォークを手に取り、慣れない手つきで料理を恐る恐る口に運んだ。

「おいしい……」

天然物を食べたのはいつぶりだろうか。なんだかとても懐かしい気がする。

そんなわけで、貴重な天然物をふんだんに使った食事に舌鼓を打ちながら、過ごしていった。

第十話・地下の少女

ゴーンゴーンゴーン

「う、うーん……今何時……？」

寝ぼけ眼で、時計を手に取ると、まだ夜中の十二時だった。

「なんで、十二時に鐘が鳴るんだろう……」

人間にとっては活動を停止する時間帯であっても、吸血鬼にとっては活動中の時間帯なのだろう。

「私……寝ちやっただ……」

服装は持ってきた寝間着ではなく、昼間着ていた服装のままだった。

「……何だろう……歌……かな？」

外からかすかに歌のようなものが聞こえてくる。

部屋の外に出るのは危ないと言われたけれど、好奇心は猫をも殺すと言っから、気になってしょうがない。

気がついた時には、私は部屋を出て、歌の聞こえてくる方へ足を進めていた。

「ここだ……」

私はとある扉の前で足を止めた。扉の向こう側から、歌が聞こえる。扉を開けてみると、地下へと続く暗くて終わりが見えない階段が現れた。

近くにあった燭台を持って、慎重に階段を降りていった。

「なんだろうこの臭い……」

血生臭さというのか腐敗臭というのか、そんなよくわからない臭いが鼻をさした。

「うづ……吐くかもしれない……」

吐き気を抑えながら、階段を降りていくと、扉が現れた。

歌もこの向こうからはっきり聞こえてくる。

ノックしてみたが、返事は無く、ただ歌だけが聞こえてくる。

「失礼しまーす……」

私は扉を開けて、中に入ってしまった。

薄暗い部屋を見渡してみたけど、誰もいない。それでも歌だけは続いている。もはやホラーのレベルだ。

「誰もいなうひゃあ!」

いきなり誰かに、耳元で息を吹きかけられて、変な声をあげてしまった。

「アハハハ！」

笑い声のした方を見ると、金髪の女の子がいた。

「驚かせてしまっでごめんなさい。歌だけ歌っていたら、退屈で退屈で」

よく見ると、女の子にも変わっているが羽が生えていた。

「すごくびっくりした……えーっと、私は紅林美奈。あなたは？」

「私？私はフランドール・スカーレット」

スカーレットと言うことは、レミリアちゃんの家族だろう。

「ねえ、弾幕ごっこしましょう」

弾幕ごっこ、初耳だ。

「ごめんなさい。わからないわ」

「弾幕ごっこを知らないの？本当に？」

「初めて聞いたわ」

フランちゃんはむーと言いながら、頬を不満そうに膨らませた。

「なら、お話して！外の話！」

「そっだなー……こんなのはどうかかな？」

私は子供　　と言つても、私より年上だけど　　が喜びそうな話はあまり知らないのです、最近の出来事の中から、面白そうな話を選んで、話し始めました。

第十一話：人騒がせな客の帰宅

「うーん、よく寝た……どこどこ？」

目を覚ましてみると、薄暗く、血なまぐさい部屋の小さなベッドで寝ていた。

「昨日は……そうだ、フランちゃんは……」

ふっと隣を見てみると、フランちゃんがタオルケットのような物を被って、床で寝ていた。

「そうだ……私、途中で寝ちゃったんだ……それで私にベッドを……」

私はフランちゃんの起こさないように、ベッドに寝かせて、そっと頭を撫でて、ごめんね、と小さく囁いて部屋を後にした。

~~~~~

階段を登りきって、廊下へ出ると、メイド達がなんだか騒いでいる。

近くにいた羽　　レミアアちゃんやフランちゃんとはまた違う薄い蝶のような羽　　の生えているメイドを捕まえて、話を聞いてみると、どうやら「客人が忽然と消えた」らしい。

私は大変だなと思いつながら、自室に戻ろうとしていた時、曲がり角で、蓮子さんに出くわした。

「あ、蓮子さんおはよ……」

「いたあああああ！見つけたあああああ！」

私の挨拶は蓮子さんの大声大会で優勝レベルの声に阻まれた。

「よかった……本当に無事でよかった……」

そしてそのまま抱きつかれた。

まもなくして、メリーさんと咲夜さんがやってきて、皆、無事ではないのだというような顔をしていた。

私は鈍感なのだろう。消えた客人というのは私の事だとこの時、気付いた。

くくく

「それじゃ、二人とも忘れ物はない？」

メリーさんはもともと荷物が少ないから、蓮子さんは私の方をジッと見つめていた。

「はい。大丈夫です」

「お嬢様はこの天気の中でのお見送りは大変ですので、代わりに私が……お気をつけて」

「泊めてくれてとても助かったわ。ありがとう」

メリーさんが咲夜さんと握手した後、私達は門に向かって歩き出し

た。

「また機会があったら一緒にお茶でも飲みましょう！」

私達がだいぶ離れた位のところで、咲夜さんは手を大きく振りながら、そう言っていた。

私達も手を振りながら、門に向かって歩いていく。

「お帰りですか？」

私達が門をくぐると、中国さんが話しかけてきた。

「ええ、ちょうど深い霧も出ているし」

メリーさんがそう言うと、中国さんは一瞬不思議そうな顔をしたが、すぐに理解したというような顔になった。

「そういえば、昨日もあなた達が来るちょっと前に深い霧が出ていましたね。これ以上聞くのはやめておきましょう。霧が晴れてしまいかもしれませんからね。それでは、お気をつけて！」

中国さんの見送りも受けて、私達は霧の中に入っていった。

~~~~~

私達が湖を半周ほどすると、霧を抜けた。

不思議な事に、後ろを振り返ってみると、さっきまで通ってきた深い霧は、もともとなかったかのように、きれいさっぱりなくなっている。

いた。

視界に入るのは、雲一つない青空と、緑の生い茂る森だけ。あの不釣り合いにも程があるような、湖の反対側にあるはずの真っ赤なお屋敷はどこにも見あたらなかった。

「帰ってこれたんですよね……？」

「紅魔館が見えないから、そうなんですよ」

メリーさんは素っ気なくそう答えた。

「それじゃあ、二人とも行きましょう。帰りも時間かかるからさ」

蓮子さんは喋りながら、すでに歩き出していた。

「ふう、蓮子はせっかちなね」

私も二人を追いかけようとしたとき、微かにあのお屋敷で飲んだ紅茶の甘い匂いを感じ取った。後ろを振り返ると、そこにはあのお屋敷がありそうな気がしたが、その幻想を壊さないために、振り返らずに、二人の後を追いかけた。

「待つてくださいよー」

第十二話：TPOをわきまえよう

私達が紅魔館から帰ってきて、数日後のとある日。

私はいつも通りに、大学の奥の方にある部室に向かった。

「何でだろう……なんとなく凄い事が起こりそうな気がする……」

根拠もないのだけど、本当に起こりそう気がしてならない。

「きつと気のせいだよね……」

秘封倶楽部の活動の約八割が行われる部室の前でとある変化に気付いた。扉に見慣れない一枚の紙が貼られていた。

「なんだろうこの紙は……『愛を育んでいます。関係者以外立ち入り禁止』……」

いちおう関係者だけど、少し怖いので、扉を少しあけて、中をのぞき込んだ。

「待つてメリー！はやまらないで！お願いだから！」

蓮子さんは何かを恐れるようにして、すでに部屋の隅に追い込まれているのだが、さらに後ろに下がろうとするような仕草を見せている。

「何で？私はもうマエリベリー・ウサミよ。夫婦が愛を育んで何がおかしいの？」

メリーさんの顔は見えないが、とても恐ろしい笑顔なのだろう。

「いつ入籍したの!」

「昨日」

メリーさんはまた一歩蓮子さんに近づく。

「判子は!」

「!」

取り出した判子を片手にさらに一歩近づく。

「法律は!」

「愛に法律は無いわよ」

体が密着する位に近づいた。

「ゆっくり育みましょう」

「あ……あ……」

私は心の中で何度も蓮子さんに謝りながら、帰ることにした。

途中、後ろから、アーツ!とか聞こえたのは気のせいだろう。

~~~~~

「とうとう夢を見たんです」

しばらく二人には口も聞いてもらえなくなりました。主にメリーさん。

### 第十三話：異常気象とクーラー

七月。まだ少し梅雨が続けているのに、最近はかなり暑い。ニューズでやっていたが、今年は何十年ぶりの異常気象のようだ。それでもって、その昔の異常気象は今とは比べものにならないくらいにひどかったらしい。そうになると、今は幾分かはましだろうと思うのだが、ということとは、まるでないのだが。

「暑い暑い暑い暑い……」

蓮子さんはテーブルに突っ伏して、延々と、そう呟いていた。

「蓮子、ちょっと黙ってちょうだい。こっちまで暑くなるわ」

「そうですね。静かにしてください」

「グツ……アウエー……」

なぜ私達がこんな会話をしているのか、簡潔に言うと、クーラーが壊れた。

ここにあるクーラーは電気店の最新機種スペースに並ぶような素晴らしいクーラーとは程遠い、電気店の人も知らない位に古いクーラーなのだ。蓮子さんとメリーさんがここを使い始めた頃には既にあったそうだ。誰が、いつ、取り付けたかなどは全くわからない。

ここのおじいちゃんクーラーは昨日まで元気に動いていたのに、今日の朝方にぼっくり逝ってしまったようだ。

「クーラーはサークルの費用として……」

「うちは非公認」

「そうでしたね……」

窓を開けても、風は吹いてない。さらに運の悪いことにここはとて  
も日当たりが良い。まさに地獄だ。

「あー……二人とも……」

蓮子さんはダルそうに頭を上げて、そう言った。

「何？手短にすませてね」

「かき氷食べに行かない？美奈のおごりで」

「ちよっ！何で私なんですか！」

「良いわね。行きましようか」

二人は私の言うことを聞かずに、さっさと出て行ってしまった。

「後で絶対に見返りを受け取るっ……」

私は部屋の中で唯一寒い懐について考えながら、二人の後を追った。

## 第十四話：かき氷と蓮台野

「んー……うまいー！やっぱり夏はこれよね」

「そうね……昔から続く文化でもあるからね。どうしたの美奈元気ないわね」

私のテンションは二人のテンションとは真逆。異様に暗い。店全体としては明るいのだが、私ひとりだけ暗い。例えるなら、白い服に墨汁を一滴垂らしたような感じである。

「……あれ？おかしいな？何度数えても、三十二円しかない……ははは……」

二人がデラックスななんとかと言う、千五百円くらいするかき氷を頼むから、私は三十二円で今月を過ごさなければならなくなっていたのだから、当然だ。

「悪いことしたわね……」

「うん……」

「同情するならお金をください」

「それは無理」

ハモって断られた。

「じゃあ、なんか話してください。面白い話」

普段は話なんかで、満足するはずはなかったのだけど、この時は、シヨックが大きすぎたのだろう。

「話ね……」

「そつだ！あれはどうか？ほら、蓮台野の話」

「蓮台野？」

初めて聞いた。地名なのかすらわからない。

「知らないか……けっこう近くなんだけどね」

あれは秋のとある夜の話なんだけどね。そう言って、蓮子さんは語りだした。

「私の情報網をフル活用して、蓮台野の情報を手に入れたの」

「その情報網が何なのか教えてくれた事は無いんだけどね」

そういえば、この前の時も写真を持ってきたのは蓮子さんだ。蓮子さんの実家は東京だと聞いたことがある。東京のヤの付く職業の人の情報収集力は凄いと聞く。そうなるに蓮子さんが恐ろしく見えてきた。

「それで、その話をした二日後の夜、出発したわ」

「二日後？蓮子さんの事だから、その日かと思いましたよ」

私は少しイヤミを言いながら、話を聞き続けた。

「今回は色々条件があったの。だから二日後」

その条件とやらを聞いてみようとしたが、既に話は先に進んでいて、聞くタイミングを逃した。

「二日後の二時十五分くらいに蓮台野についたわ」

「肌寒くてね、凍え死ぬかと思ったわ」

蓮子さんが話して、メリーさんが相槌を打つような形が成り立っていた。

「彼岸花が一面に咲き誇っていてね、それが妖しさを醸し出していたの」

「私は彼岸花が嫌いだから、あまりそこに居たくなかったんだけどね」  
メリーさんの言葉を聞いて私は少し疑問に思った。あの部屋には季節はずれの白い彼岸花が飾られていたからだ。しかも手入れしているのはメリーさん。これは後で聞いてみよう。

「運命の時間二時半が迫っていたわ」

「夜中、墓場で空を見上げて、ぶつぶつと時間を呟いているのを想像してごらん。気持ち悪いわよー」

蓮子さんが空を見上げて時間を呟く姿が簡単に想像できた。

「二時半ジャスト！」

蓮子さんが大声を出して、立ち上がったので、周りの視線が痛かった。

「私が墓石を回すと、そこに広がった景色はなんだと思う？」

「えーと……三途の川……とか……」

彼岸花と言ったら、三途の川。我ながら安易な考えだ。

「はずれ。正解は一面の桜。秋の桜だからって秋桜じゃないわよ。春、満開になるピンクの桜。あれは日本のどこを探しても見つからない景色よ」

そこまで言われると見てみたくなくなるのだが、私は場所も条件とやらも知らない。蓮子さんに色々聞く必要があるそうだ。

「はい。じゃあ、ここまで。あんまり長居するのは悪いからそろそろ行きましょ」

メリーさんはあの山盛りのかき氷やアイスクリームを食べ終わっていた。

「えっ？ちよつともう食べたの？」

対して蓮子さんは半分も食べ終わっていない。

「しょうがないわね。もう少し居座りましょ」

「他に話は無いんですか？」  
立ち上がっていたメリーさんは座り直して、そうねと呟いて、少し考え込んだ。

「あるわよ。博麗神社の話が」

「そうね。それにしましょうか。だけど、蓮子は食べるのに集中すること」

蓮子さんはやはり話すつもりだったらしく、少しシユンとして、大人しく食べ始めた。

「あれはね、蓮台野に行った数日後でね……」

その後、蓮子さんは三十分ほどでかき氷を食べ終えたが、メリーさんの話がなかなか終わりを見せなかったために、結局二時間ほど居座ったのだった。

## 第十五話：竹林の秘封倶楽部

「蓮子さん……これが世間一般で言う、遭難という奴ですか？」

「そうなんです……うん、ごめん。だからそんな顔しないで」

今現在、私達は夜の竹林をさ迷っている。蓮子さんが天然の筍が沢山取れると情報を仕入れたので、ついに行ってみればこれだ。

「とりあえず、GPS使いますか」

「無理よ」

私が携帯を取り出した所、今まで黙っていたメリーさんが口を開いた。

「ここは圏外。GPSは当然使えないわ」

確かに携帯のディスプレイには圏外の文字があった。正直言って、始めて見た気がする。

「メリーさん何か知ってるんですか？」

「もちろん。来たことあるからね。夢の中だけど」

私の淡い希望は「夢の中」という単語によって、完全に破壊された。

「あら、あなたは夢と現を別々の存在って思っているの？残念ながら、それは間違いよ。夢と現は等号で結べるような存在よ」

メリーさんはこんな状況の中、夢と現についてペラペラ話し始めた。

（美奈、途中何度か感心するふりとかしておきなさい。自分が満足するまで喋るから）

（わかりました）

蓮子さんの言うとおり、メリーさんは長々と夢と現について話していた。

メリーさんの話にうんざりし始めたころ、変化が訪れた。

「おい、あんたら」

前方に長い銀髪に沢山のリボンをつけたモンペを着た女性が現れた

「迷子か？薬屋と出口、どっちを目指しているの？」

「あの……あなたはこの竹林の持ち主……」

今のご時世持ち主のいない土地は皆無。何が言いたいかと言うと、下手すれば、私達は泥棒として捕まるのだ。最初に気づくべきだった。

「持ち主？この竹林に持ち主なんかいないさ。強いて言うなら、あの詐欺兎だな」

兎は詐欺なんかしないだろうと思っていると、女性は再び問いかけてきた。

「で、あんた達は出口と薬屋どっち目指しているの？」

「出……」

「薬屋です！」

今よくわかった。蓮子さんは帰る気がさらさら無いのだと言いつことが。

「薬屋か……付いて来な」

どうやら案内してくれるようなので色々助かるが、出来れば出口に案内して欲しかった。

「メリーさん……大丈夫ですか？」

「えっ？ええ……大丈夫よ……」

メリーさんが女性に怯えているという事がひしひしとは伝わってくる感じがした。

「本当ですか？汗とか凄いですよ」

別に特別暑いというわけではない。むしろ肌寒いくらいだ。メリーさんののは過度な緊張による嫌な汗だと言うのはよくわかる。

「も、もちろんよ。ごめんなさい。心配かけちゃって」

「ほら、ついたぞ。じゃあ私はこれで」

メリーさんに気を取られていたせいもあるのか、いつの間にか和風で大きな屋敷にたどり着いた。

「あ、ありがとうございます！」

お礼を述べると、女性は私達に背を向けたまま手を振ってくれた。

「じゃあ、入りましょうか」

「今、夜中ですよ。いくら何でも迷惑ですって」

「すいませーん。誰かいませんかー」

私が止めるのも聞かず、蓮子さんは勝手に玄関に侵入して大声で叫んだ。

「はい！何か用ですかー？」

終わりの見えない廊下を誰か走ってきた。

近づいてきて、顔までは不可能でも、服装はかろうじてわかる。紺のスカートに紺のブレザー。ここまで見たら、普通の制服。しかし、その人の頭には兎の耳があった。

「お待たせしました。何かご用ですか？」

「コスプレ？」

私と蓮子さんは全く同じ疑問をぶつけた。

「なっ！コスプレとは失礼な！これははえてるのよ！」

つまり、人外である。

「ああ、それは失礼しました」

とりあえず、大人しく謝っておいた。

「それで、ご用は？」

「えーと……」

蓮子さんが応えようとした時、私達二人の間を金色の何かが横切った。

「メリー！」

「メリーさん！」

メリーさんが倒れる前に、二人でメリーさんを押さえることが出来た。

「あなた達！その人をこっちに連れてきて！すぐに診察するから！」

メリーさんを二人で抱えて、言われた通りについていった。

## 第十六話：熱意と小さな何か

その後、医者でもあり、薬師でもあるという永琳さんにメリーさんを診察してもらった。

なんでも極度の緊張による過呼吸らしい。普通は気は失わないけど、緊張の度合いが強すぎたのかもしれない。

と、永琳さんは言っていた。

メリーさんは未だ目を覚まさない上に、朝まで安静と言われたので、一晩泊めてもらう事になった。

「蓮子さん。まず言うことは？」

「すみませんでした」

蓮子さんは寝ているメリーさんに小学生が母親に無理やり頭を下げさせられるような感じで謝った。

「蓮子さん、なんであそこで帰るって言う選択肢を潰したんですか」

私は別世界に行くという経験は今回もあわせて二回。私が入る前、秘封倶楽部がどんな活動をしていたか、わからない。

こつこつ事になれているから、蓮子さんが帰る選択肢を潰したのかさっぱりわからない。

「美奈はさ……私達に不思議な力がある事を信じてくれたよね」

蓮子さんは座り直して、私と向かい合った。

「ええ。信じました」

いつになく真面目そうな顔の蓮子さんに少しビビりながら、蓮子さんの話を聞き続けた。

「中身の見えない箱があったとしましょう。その箱の中身を一人だけ見れる。覗いたのは自分の友達だった。あなたはどうする？」

「えーと……何が入ってたか聞きます」

いきなりの良くわからないたとえ話に戸惑ったものの、自分の思った事をそのまま話した。

「何を見たか気になる。自分も見たい。それよ！それなの！」

蓮子さんはいきなり立ち上がって、そう叫んだ。

「メリーは結界の向こう側が見える。向こう側を見たという話は何度も聞いたわ。そして私は思ったの、メリーと同じ世界を見たい！  
つてね」

蓮子さんの未知の世界を知りたいと言うような熱意は語っていた時によく伝わってきた。

「あの……顔近いです……」

蓮子さんがちょっとバランスを崩せば、キスしてしまうような距離

で語るから、熱意と共に大量の唾が飛んできた。

「あつ、ごめん」

蓮子さんに渡されたハンカチで顔を拭いてから、ハンカチをしまった。

「蓮子さんの熱意は良くわかりました。私も未知の世界を探すのに賛成です。蓮子さんに報告しなかった私の責任ですが、今回のような事が起こるのなら、やっぱり……」

「そっか……そうよね……」

何ともいえない空気が部屋の中に広がっていた。

そんな中、突如クスクスと言う笑い声が聞こえてきた。

「良いじゃない二人とも。旅にハプニングは付き物よ」

メリーさんが上半身だけ起こして、笑っていた。

「メリー……大丈夫なの？」

「ええ。不思議と気分は良いわ。だけど、すごく眠いの」

そう言ってメリーさんは大きくあくびをした。それにつられて蓮子さんも小さくあくびをした。

「ああ、もう二時回ってますね」

いまだに圏外のままである携帯を見ると、02:13と表示さ

れていた。

それを見て急に眠くなってきた。

「二人とも、私は大丈夫だから眠いなら寝た方が良いわよ」

「そうよ美奈。さっさと寝ないから、小さいのよ。何がとは言わないけど」

蓮子さんはいつの間にか自分の分の布団を敷き終えて、布団に入っていた。なんとという早業だろうか。

「なっ！し、失礼な！それなりにありますよ！それなりに！」

蓮子さんの言葉に反論しながら、私はちゃっちやと布団を敷いている。蓮子さんはニヤニヤしながら、メリーさんは微笑みながら、その様子を見ている。

「何怒ってるのよ。私はただ、靴のサイズの事を言っただけじゃない」

「……消しますよ……」

もう、蓮子さんの言葉は聞かないことにした。大人しく寝よう。そうしよう。

それと、私は小さくない！何がとは言わないけど。

## 第十七話：真夜中の縁側

眠れないまま一時間が過ぎようとしていた。

隣から一定の間隔で聞こえてくる寝息と、これまた一定だが時折寝言の聞こえる寝息が恨めしい。

「だから、美奈は小さいのよ……胸が……ムニヤムニヤ」

あっ、言った。ついに言った。しかもわざとらしくムニヤムニヤとまで言った。

「……」

いい感じで眠れそうな時に限って尿意が襲ってくるものだと思う。この年になって漏らすなんて事はしたくない。そつと部屋を出てトイレに向かうことにした。

~~~~~

「あれ？蓮子さんがいない……」

トイレから戻ってくると、蓮子さんの布団はもぬけの殻だった。

私は少し開いた障子の隙間から光が差し込んでいて、障子に人影が映っているのに気づいた。

「蓮子さん？」

障子を開けてみると、縁側には鈴仙さんとは違うウサミミの女の子が腰かけながら、足をぶらぶらさせていた。

「誰？」

「私の事はどうだって良いじゃない。それよりどうだい？」

女の子は自分の隣の床を軽く叩いた。私はそこにゆっくり腰を下ろした。

「あなたは何してたの？」

「月を見ていたの」

そう言って女の子は空を見上げた。私もつられて空を見上げると、そこにはプラネタリウムでしか見れないような視界を埋め尽くす程の星と満月に少し満たない月があった。

「ねえ、鈴仙のことは知ってる？」

すごいと思っていると、唐突に話しかけられてビクツとしてしまった。

知っているには知っているから小さく頷いた。

「鈴仙は私達のような地上にいる兎とは違う。月の兎なの」

私は月を見ながら話す女の子から目を離せずに話を聞いていた。

「長年地上から月を見てきたからね。鈴仙が来たときはワクワクし

たよ。なんてつたつて自分の知らない場所から来たんだから。話はいろいろ聞いたけど、やっぱり自分の目で見てみたいって気持ちがあるの。だからこうやって話に聞いている月を想像する時がたまにあるの」

この子は蓮子さんに似ている。と言つのを話を聞いていて大いに感じた。

未知の世界を見たい。だけど、この子には地上と月の莫大な距離を
行く方法はない。それに比べて、私達は未知の世界との距離は一步
踏み出せば到着のようなものだった。なんて幸せなんだろうと改め
て感じ取れた。

「ふぁー……なんか眠くなってきた……私は先に寝ますね」

女の子の話が終わると急激に眠気が襲ってきた。

「お休みー」

私は縁側から布団の中へと場所を移して、目をつぶるとあっといっ
間に深い眠りに落ちていった。

第十八話：秘封倶楽部の時間

「……………出て行った……………？」

美奈がいなくなった事はチャンスに変わりないから、良いでしょう。

縁側の方の障子を少しあけて時間を確認すると、02:04。草木も眠る丑三つ時。

「丑三つ時と言ったら、秘封倶楽部の時間でしょ」

ネクタイを締め直し、壁にかけておいた帽子を被って、廊下の襖をそつと開けて、左右を確認した後、部屋を後にした。

「本当はメリーと行きたかったけど、無理させるわけにはいかないからね」

私はおそらく美奈が向かったであろうトイレとは逆、つまり永琳さんの書斎の方へと歩を進めた。

~~~~~

実を言うと、この前紅魔館を訪れた時にも、こういう風にメリーと散策したのだ。まあ、その話は後にするでしょう。

長い廊下でいくつか襖を開けようとしてみたが、ビクともしなかった。セキュリティ堅いわね。体当たりでもすれば開くのかしら？

そんな中、一カ所だけ開いている襖があった。こんなセキュリティ

ーが堅いなか、開いているなんて、入れと言っているようなものじゃない。だから入る。私は悪くない。開いてる襖が悪いのよ。

入ってみると私達が泊まっている部屋より少し広いくらいの和室で、七つの盆栽と盆栽らしき物が飾ってあった。

私はその盆栽らしき物を手にとって、まじまじと見てみたが、どうみても枯れた木にしか見えない。

一旦、枯れ木を元の場所に戻して、他の盆栽を鑑賞する事にした。

「誰？泥棒？」

二本目を見ようとした時に、着物を着た、腰くらいまである綺麗な黒髪の女性が入ってきた。

普通の人なら、ここで弁明のようなものをするだろう。だが、私はあえてしない。

「ええそうよ。盆栽泥棒の宇佐見とは私の事！」

あえて乗っってみるに限る。そしてこの後の反応で、その人がどういう人かだいたいわかる。

「なに！貴様が最近世間を騒がしている盆栽泥棒か！」

わかった。この人はノリが良く、私が逃走しようものなら、銭形のように追いかけてくるだろう。そして、おそらく、私が何をしていたか話しても「ふーん」程度で済ますような人だ！どこからそんなに読み取ったと言う質問は受け付けない。

「この盆栽は他の物とは比べ物にならないくらい美しいそうじゃないか。だからそれを私がもらい受けるのだ！」

「させるか！皆の者！出逢え！出逢ええ！」

「……」

「……」

そして、二人でしばらく笑った。

~~~~~

「あなた面白いわね。あなたは患者さんかしら？ようこそ、私の盆栽部屋へ」

ひとしきり笑った後、お互い向かい合って座ることにした。

「私、宇佐見蓮子。別に盆栽泥棒じゃないし、患者でもないわ。しがない秘封倶楽部の一人よ」

「私は蓬萊山輝夜。竹取物語のかぐや姫とは私のことよ」

私はなんとも言えず、何度もかぐや姫（自称）を上から下まで見つめた。

「あら？信じられない？」

「私は自分の目で見ないと信じられないたちなんでね。証拠を見せ

てもらわないと」

とりあえず、かぐや姫（自称）に難題とまではいかないにしても、それなりの難易度の問題を出してみた。

「証拠？ちよつと待ってなさい。今持ってくるから」

そう言つてかぐや姫（自称）が席を立つた。まあ、問題が解かれても、私がただ貴重な経験を出来るだけ。そんなわけで、今とてもワクワクしている。

「ほら、これよこれ」

かぐや姫（自称）は戻ってくると、私の前に並べていった。

「あなたから見て、右から、火鼠の皮衣、燕の子安貝、仏の御石の鉢、龍の頸の玉」

右から、薄汚い白い毛皮、土産物屋にありそうな貝殻、石焼きビビンバの器、大きなビー玉にしか見えない。

「そして、これが蓬莱の玉の枝よ」

かぐや姫（自称）は先ほどの枯れ木を手を取った。

「この火鼠の皮衣に火をつけても……」

「ああ、良いわよ。どつぞう自由」

許可も出たことだし、私は帽子の中からフリント式のライターを取

り出した。なんで入っているんだ。と言われたら、秘密。と応えるだけの事。女の子は秘密がいつばいなよ。

歯車を回して、火鼠の皮衣を火の中に入れた。

燃えない。

燃えにくい素材と言うのは多々あるが、火を当てれば黒くなる。だけど、これは違う。寧ろ、火を当てた部分が薄汚れた色から、何の汚れもない白になっていく。

少なくとも私はそんな素材は知らない。本物と考えて良いと思う。

「いくつか質問しても良いかしら？」

「ええ、良いわよ」

そうとわかれば、質問責めにするまでだ。私は、歴史学者や竹取物語の研究者だったら間違ひなく喜乱舞するくらい超有名人に出会ってるのだから、それが普通だろう。

どれくらい質問したかは忘れたが、どんな質問をしてどんな返答がきたかははっきり覚えている。「新説・竹取物語」と言う本が書けそうなら面白い事を聞いたが、これは私の心の中だけに閉まっておくでしょう。

かぐや姫と別れて、部屋に戻って寝ようと思った時には障子の隙間から太陽の光が差し込んでいた。

第十九話：夜明け

「呼吸も落ち着いているみたいだし、大丈夫だと思うわ」

それを聞いて、私達は胸をなで下ろした。

「こういう事を聞くのは、心苦しいのだけど……あなた達お金あるのかしら？」

「「あつ……」」

私とメリーさんは同じように呟いた。

「私もあんまり言いたくないのだけど、こんな場所に住んでいるし、生活もあるから……」

「お金なら私が払うけど」

蓮子さんの言葉がこんなにも頼もしいと思ったのは初めてかもしれない。

「交渉するから、二人は出てて」

閉め出されました。

「メリーさん、良かったですね」

「ん？ありがとう」

メリーさんはニコツと言う擬音が聞こえそうな笑顔でそう返してくれた。

「ああそうだ、こんな時に聞くのも変ですけど、メリーさんは彼岸花嫌いとか言っていましたよね」

「言ったわね」

「けど、部室に彼岸花みたいなの置いてありますよね？なんでですか？」

「あれは特別だからよ」

「二人とも！帰る前に筒探しに行くわよ！」

勢い良く襖が開いて、笑顔の蓮子さんが出てきた。おかげでどう特別なのか聞くタイミングを失った。

でも、メリーさんが嬉しそうだから、良いんだけど。

「しかも、ここの竹林に詳しい人がガイドとして、ついてくれるそうよ」

そして現れたのが、縁側の女の子だった。

「まあ、貰うもの貰ったのなら、ちゃんとしないわけにはいかないわね」

夜とは全然雰囲気違った。こんな事を言うと、誤解されそうだが、別に変な意味じゃない。

くくく

私達は大量の筍を採った。ガイドのてみちゃんの指示する場所を掘れば、巨大な筍が、というのが何度もあった。

「今日はありがとう」

「貰ったもの貰ったからね、私もちゃんとするさ。ここをまっすぐ行けば出口よ」

「それじゃあ、永琳さん達によろしく」

ひととおりの挨拶をした後、私達はてみちゃんに言われた方向へ歩き、竹林を抜けると、そこは私達が竹林に入った場所だった。

「帰ってこれたわね」

今引き返しても、またてみちゃんに会えるのか？永琳さんに会えるのか？と聞かれたら、答えはノー。私だけでは絶対に会えない。

「美奈、行くわよー」

「はぐれると迷うわよー。ここらは道が入り組んでいるからね」

私からだんだん離れていく筍をいっぱい詰めた袋を持つ蓮子さんとメリーさんの二人がいなければ、私は不思議な体験は出来ないだろう。

「えっ！ちょっと待ってくださいよー」

第十九話：夜明け（後書き）

あけましておめでとございます。今年もよろしくお願ひします。

第二十話：季節の集う場所

「あれ？メリーさんはどうしたんですか？」

部室にメリーさんはおらず、蓮子さんが一人でテーブルに顎を乗せて本を読んでいた。

「用事があるから帰るって言ってたわ」

蓮子さんはチラッとこっちを見てそう言った後、本に視線を戻した。

「私を待つてくれたんですか？」

「まあね。私達がいなくてもあなたずっと待つてるでしょ？」

蓮子さんは本に目を落としたままそう言った。

ずっととは言わないが、確かに待つ。けど、それなら連絡して欲しい。

「連絡しろって言われても、私あなたの行動パターン知らないし…」

…

蓮子さんは本を見ながら、メモ用紙に何かを書き込んでいく。

「な、なんで考えていた事わかったんですか？」

「秘密」

「そう言えば、さつきから何を読んでいるんですか？」

私はずっと気になっていた事を聞いてみた。

「こつこつ本」

蓮子さんが読んでいたのは『色・大きさ・開花順で引ける花図鑑』
という蓮子さんらしからぬ本だった。

「あつ、今、私に合わないって思ったでしょ」

「お、思ってますよ。なんでそんなの読んでいるんですか？」

蓮子さんは一枚の写真を見せてきた。それはどこだかわからないが
様々な花が咲き誇る場所の写真だった。

「うわー……綺麗ですね……あれ？けどこれおかしいですよ。こつ
ちには桜が咲いているのに、こつちには向日葵が咲いてる」

他にも、彼岸花や椿にタンポポ、朝顔さらには菊など四季折々の花
が一枚の写真に映し出されていた。

「不思議でしょ？私、花には疎くて、どの花がいつ咲くのかさっぱ
りで」

「そういう事ですか」

「まあ良いわ。今日は帰るとしましょうか」

そう言って、蓮子さんは本に写真とメモ用紙を挟んで閉じた。

「あっ、帰りにお茶でも飲まない？いつもはメリーと行く店だけど、どうせ今日はいないしね」

メリーさんには良く誘われるのだが、蓮子さんから初めて誘われたかもしれない。

「じゃあ、せつかくですし……ぜひ」

「美奈の奢りで」

「えっ」

一瞬、「誘っておいてそれはないよ」とは思ったけれど、すぐに、「まあいいか」と思った。せつかくの誘いを懐の寒さを理由に断つたら、申し訳ないから。

「しょうがないですね。行きましようか」

「良いの？やった！」

そして二人で部室を後にした。

第二十一話：今は無き廃れた神社

【第二十一話：今は無き廃れた神社】

「えっ！行かないんですか？」

「行かないわよ」

蓮子さんは口にくわえたポツキーを器用にくるくる回しながら言ってきた言葉は私をかなり驚かせた。

「行かないというより……行けないの方が正しいかしら」

メリーさんが例の写真を見ながらそう言った。

蓮子さんの言葉もそうだが、メリーさんの言葉も良くわからない。

「意味がわからないって顔してるわね。教えてあげるわ。ここ見なさい。ここ」

蓮子さんは写真の上部、つまりは雲一つない青空を指差した。

「私の能力が使えるのは夜限定。昼間は無理なの。わかった？」

「あー……はい」

すっかり忘れてた。

蓮子さんが写真を持ってくる「出発という方程式が成り立っていたからしょうがないと言えばしょうがないのだけねど。」

「落胆する必要はないわよ。別の所行くつもりだったし」

蓮子さんは別の写真をテーブルに置いた。

写真には何も写っていない。更地の写真だった。

「次にこっちを見て」

今度の写真は立派とは言い難いちょっと廃れた神社が写っていた。

「これ、同じ場所？」

メリーさんが二枚を見比べながら、そう言った。言われてみれば、似ている場所が何力所かあるのがわかる。

「同じ場所よ」

「これのどこが変なんですか？」

建っていた神社が取り壊されて更地になっただけの普通の写真にか見えない。

「重要なのは日付よ日付」

「日付？平成19年8月15日ね」

メリーさんがまだ神社が残ってる頃の写真の日付を読み上げた。

「こっちは……平成19年8月16日……」

二枚の写真はたった一日で神社は跡形もなく消え去ってしまった事を表していた。

「その神社は守矢神社。だいぶ昔に神社と近くの湖が跡形もなく消え去った事でちょっと有名になった場所よ。かなりの時間が経ったはずなのに、祟りとかをおそれてるのかわからないけど、未だに更地のまま」

「でも、この写真昏間ですよ。場所はわかるんですか？」

「ばかね、ちょっと有名な場所よ。調べればすぐに出てくるわよ」

なるほど。こんな事にも気づけないなんて、自分はまだまだだど改めて自覚させられる。

「じゃあ、出発は来週の土曜日。いつもの場所に……」

「九時半集合」

蓮子さんの言葉を遮って、メリーさんが集合時間を決めた。妥当だと思つ。

「なんで来週なんですか？」

「テストあるから」

「テスト？」

私は頭の中にある「テスト」という単語を思い出してみた。

テスト【test】

- 1 . 存在理由が不明の謎の存在。
- 2 . これが迫ると謎の生命体「勉強」によってスケジュールは白紙にされ、体の自由を奪われる。

「……………テストオ!？」

私は自分の声なのに予想以上の大声に少し驚きながらも、テストの存在をすっかり忘れていた自分に更に驚いた。

「あんだテストの存在忘れてたでしょ」

「忘れてましたよ！お先に失礼します！」

私はテストを無事乗り切るために、自分の鞆をひったくるように取って、簡単な挨拶を済ませて、さっさと部屋を後にした。

【第二十二話：遅刻しない蓮子さん】

守矢神社出発当日。天気は私の気持ちとは正反対の晴天とまではいかないものの、雲も少なく、気持ちのいい朝だった。

「大丈夫……テストは出来た。大丈夫……テストは出来た。大丈夫……テストは出来た。」

「美奈ー気持ち悪いから少し黙ってちょうだい」

呟きながら駅に向かう途中でメリーさんに出会ったのは良いのだが、出会い頭に笑顔で「黙れ」と言われたのは少しショックだった。笑顔が怖かったから、大人しく黙ったけど。

「さて、どこで待つことにしましょうか？」

「いつもの所で良いんじゃないですか？」

「それもそうね。あつ、その前にコーヒー買いに行きましょう」

私達は最近、蓮子さんを待つ時にはコーヒーを買いに行くのが習慣となっていた。

「最初はグーー！じゃんけん、ポンー！」

そしてこれまた習慣のじゃんけん。

私がグーでメリーさんがパー。これでメリーさんの五連勝。また、私がコーヒーをおごることになってしまった。

「おい、二人ともー」

遠くの方から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「現在時刻、九時十八分零二秒。集合時間、九時半ジャスト……十分五十八秒も早い……」

メリーさんの待ち合わせのセリフで「早い」という単語を聞いたのは初めてだ。メリーさんの驚きぶりからして、メリーさん自身も初めて使うのかもしれない。

「メリーさん……ちょっと私の頬つねってください」

じわじわくる痛みが私の左頬を伝わっていくのがわかる。

「夢じゃないです」

「じゃあ、目を瞑りなさい。そして三つ数えたら目を開けるのよ」

私は言われた通りに目を瞑った。

「一一」

「一二」

「三！」

カッと目を開くと、私達の目の前に不思議そうな顔をして蓮子さんが立っていた。

「なにやっつてんのよ二人とも……」

「な、なんでもないです！さっさと行きましょうよ」

私は蓮子さんの後ろに回って、背中を押しながら、私達は駅に入っ
ていった。

【第二十三話：程良い位が一番良い】

「ついたー」

電車を降りて、改札をくぐり、それなりに往来のある道を見ながら、蓮子さんは大きく伸びをした。

「次はどうするんですか？」

「次は、バス。確か十三番のバス停……」

蓮子さんが指差した十三番のバス停に止まっていたバスはドアを閉めて、ゆっくり動き出した。

「美奈！あのバス止めなさい！二時間に一本なのよ！」

「ええっ！無理ですよ！」

追いつけないと分かっているながらも気づいたときには何故か走ってバスを追いかけていた。

当然のようにバスはどんどん離れていく。

お前は五十メートル走九秒後半。決して早いとも言えず、体力は人よりはある程度。そんな女が走ってバスに追いつこうなんて無理だ。お前は十分走ったから、諦める。

などと頭の中でもう一人の私がそう言うてきた。だが、そんなのを無視して走った。

そして私はバスを抜いた。

~~~~~

「いやーごめんね。お嬢ちゃん達。気づいてあげられなくて」

初老のバスの運転手さんが運転しながら謝ってきた。

「いえいえ、こちらこそ」

「すみません。無理矢理止めてしまって」

蓮子さんとメリーさんがそんなことを言っているが、正直言ってもうでも良い。

私は一番後ろの席を占領して寝っ転がっている。行儀が悪いと言われるかもしれないが、私達の他に乗客はいないし、私の足がガクガク震えて動けそうにないからしょうがない。

「美奈、これ飲みなさい。死ぬわよ」

メリーさんがスポーツドリンクを差し出してきた。

私は少し震える手でそれを受け取り、口に運び、がぶ飲みした。

ああ……体にスポーツドリンクが満ちていく……

「美奈知ってる？砂漠での死因は溺死が多いらしいわよ。水を一気に飲んで、肺に水が入って死ぬらしいわよ」

それを聞いて、スポーツドリンクを少し吹き出した。

「な、なんで今そんな事を言うんですか！」

「気をつけなさいって事を教えようと思って」

絶対わざとだ。悪意のある笑みを浮かべている。

「ハンカチ貸してあげるから、汗を拭いて、到着までゆっくり休みなさい」

そう言っつて、メリーさんは白いハンカチを渡してくれた。

そのハンカチで手の届く場所は拭いて、バスに揺られながら休むことにした。

## 第二十四話：山の上の平地（前書き）

2011年3月25日現在、携帯を長時間いじっているのがだいぶ困難になっています。

携帯で色々書いている身ですので、更新率がさらに下がる可能性が高いです。

ただでさえ遅い更新がさらに遅くなるのは大変申し訳ないのですが、どうかお許しください。

なんとか月一で更新はしようとは思っています。

## 第二十四話・山の上の平地

「ありがとうございます」

私達はバスを降りて、運転手さんに深々と頭を下げた。バス代を無料にしてくれたんだから、感謝しないわけにはいかない。

「いやいや、気にしないで。こっちも悪い事しちゃったから。じゃあ、お嬢ちゃん達、気をつけて」

運転手さんはそう言うと、自動ドアが閉まり、ゆっくりバスは走って行った。

私達が降りたのは小さな町の一角にあるバス停“守矢神社麓”にいる。地名が示している通り、山の麓だ。石段はとても長く、足が棒になりかけている私に登れるかと聞かれると、当然、無理と答える。おそらく、元気で同じだろう。つまり、その位長い。

「さて、登るとしましょうか」

蓮子さんのこのセリフさ安易に予想出来た。

「蓮子さん、急がば回れということわざ知ってますか？」

もうどんな答えが返ってくるかなどわかりきったようなものだが、淡い希望を持ちながら、聞いてみた。

「もちろん。でも、見たところ回り道出来そうにないから登る。メリーもそう思わない？」

「そうね。私もそう思うわ」

この人達にいたわりの気持ちはないようだ。

「いたわりはあるけど、美奈程度に使おうとは思わないわね」

言葉通りに二人は石段を登り始めた。

私はしょうがなく、近くに落ちていたちょうど良い長さの木の枝を杖にしてゆっくり石段を登っていった。

~~~~~

石段から二人の姿が見えなくなって、数分。私はやっとの思いで石段を登りきった。

登りきつてはみたが、何も無い平らな土地だった。

蓮子さんとメリーさんはそれぞれ別な所をうろろしている。登ってきた私には気づいてないようだったので、寄りかかるのにちょうど良さそうな木の根本でしばらく休む事にした。

次に気づいた時、左に蓮子さん、右にメリーさんが座っていた。

「あ、やっと起きた」

蓮子さんの言葉から察するに、私は寝てしまったようだ。

「何か見つかりましたか？」

「小石程度の穴が幾つか見つかるくらいで何も無いわね」

蓮子さんは両手を上げて、収穫が無いことを伝えてきた。

「でも、私はここに何かあると思うの。私はメリーが嘘をつくなんて思っていないから、穴が無いのはわかるわ」

「じゃあ、なんで……」

蓮子さんは立ち上がって、石畳があつたと思われる場所まで移動した。

「なんでなんて愚問ね。メリーがヒントをあげるから考えてみなさい。私は一度降りるわ。ちょっと気になることがあるの」

メリーさんに全てを押し付けて、蓮子さんは石段を降りていった。

「美奈、推理の時間よ」

第二十五話：推理の時間

「一つ目のヒント。守矢神社が消えたのは？」

これが名探偵の出すヒントで怪事件を解き明かす心情というものなのだろう。とても気が引き締まる。

「確か……2009年8月。約百年前ですね」

「正解。二つ目。百年ってとても長いわよね。百年もあれば世界は大きく変わっていくわ」

メリーさんが言いたいことが全く見当もつかない。

「もっとわかりやすく……」

「ダメ」

にこやかに拒否されてしまった。

しょうがなくメリーさんの言葉を頭の中で何度も復唱して考えてみることにした。

「はあ、もう一つだけヒントをあげるわ。私達は何度かおかしな所を見ているわ。あなたはそれに気づいてないだけ」

私の長考に呆れたメリーさんがもう一つヒントをくれた。

「おかしな所……」

メリーさんのヒントによれば、おかしな所は何個もあるらしいから、バスを降りた辺りからの状況を思い出してみることにした。

「……もしかして、変わってないという事ですか？」

よく考えてみれば、確かにおかしな所はいくつものあった。バス停、石段に境内。全部おかしい。

「まあ、正解ね。百年もの間、雑草が生えないなんて有り得ないわ。石段にも落ち葉一つ落ちていなかった。ここは誰かに管理されてるのよ」

バス停の百年経っているのにバス停には守矢神社と書いてあった。守矢神社は有名な神社でもなんでもない。だったら、バス停の名前に残す意味はない。

「いったい誰に……」

「今重要な事は誰が管理しているか、ではなくて、何故管理されているかよ」

確かに、誰が管理しているかというのがわかってても、なんの面白味もない。何故を説明してこそここに来た意味があると思える。

そして、面白いことに何故に対する答えは私の中でなんとなくわかっていた。

「管理されている理由って、何かを恐れているからですか？」

「良くわかったわね。おそらく、守矢神社には祟り神がいたのよ」

そもそもここに何も建っていない事が不思議でしかたなかった。私の主観だが、ここからの景色はかなり良い。そして何よりも広い。平気で一軒家が二、三建ちそうだった。だが、祟りを恐れているというなら話がつながる。私だって祟り神の土地なんかに住みたくはない。

「次のヒントは何ですか？」

「えっ？ああ、ないわ。これ以上考えるのはちょっと難しいから。だから大人しく蓮子を待ちましょう」

さっき蓮子さんの言っていた気になることと言うのは、祟り神に関する事なのだろう。

「ー、とお腹が小さく空腹を告げたが、蓮子さんが帰ってこない分にはどうしようもないので、大人しく待つことにした。

第二十六話：二カ所の祭会場

「遅いですね……」

太陽がだいぶ傾いている頃合。未だに蓮子さんは戻ってこない。

「少し遅すぎるわね」

蓮子さんがいなくなってから、大体二、三時間経った頃だろう。普通ならばもう戻ってきてきても良い位だ。

「まさか、蓮子さんの身に何かあったんじゃない……」

「呼んだ？」

私の考えはほんの数秒で杞憂に終わってしまった。ビニール袋を持った蓮子さんが歩いてきていた。

「町の反対側にしかコンビニがないって言うのも問題あるわよね」

そう言っつて蓮子さんは私達にアンパンと牛乳を手渡してくれた。

「昼食よ昼食。お腹すいてるだろうと思っつてね」

蓮子さんは私の隣に座って、ビニール袋からサンドイッチと缶コーヒーを取り出した。わざわざ遠いコンビニにまで行って買っつてきてくれたんだから、文句は言わない。むしろ少し感謝している。

「どこまで教えたの？」

「一応大まかに教えておいたわ」

そう、と言って蓮子さんはサンドイッチを頬張った。私もお腹が空いていたから、アンパンを取り出して食べた。ふと、メリーさんの方を見てみると、メリーさんの持っているアンパンは既に半分程になっっていた。

「蓮子の方はどうなのかしら？」

「もちろん収穫はあつたんですよね？」

長い間待たされたのだから、それなりの収穫がない場合は待っていたとしても、骨折り損だ。

「当然。色々な人に話を聞いたり、古い文献をちょっとあさってわかったのが、守矢神社が祀っていた神様は農業の神らしいわ。表向きにはね」

表向きにはという事は、当然裏がある。それが世界の常だと思う。

「守矢神社では豊作を祝う祭が毎年“湖”で行われていたらしいわ」

蓮子さんは近くに落ちてた木の枝を使って、地面に「湖」と「神社」と書いて、湖の方に「豊作祭」と書いた。

「夏祭りや例大祭を含めてその他全ての祭は境内で行われていた」

次に神社の方を何度か回った。その後、「豊作祭」の文字の下に線

を引いて、その下に「農業神」と書いた。

「豊作祭を湖でやるという事は、そこに農業の神がいたという事よね？じゃあ、本殿には何がいたのかしらね？」

乱雑に囲んで二割ほど消えてしまった神社の文字の横に「？」を付け足した。

「私が話を聞いた人の中に同じ行動をした人が何人もいたわ。そして、その人達に共通しているのは全員八十歳を超えた老人だと言うこと」

「同じ行動って言うのはなんなのかしら？」

「全員、私が『守矢神社』と口にした時、物凄く驚いていたわ。その後の会話でも全員挙動不審になっていたし」

守矢神社の祟り神というのは、私が子供の頃良く言われた「嘘をついたら、閻魔様に舌を抜かれる」という決まり文句の閻魔様とイコールで結ばれるだろう。子供が悪さしないようにその恐ろしさを刷り込む。そして、そんな存在は成長すれば信じなくなる。

だが、ここの地域は少し違う。神社をたった一日で消す方法は今の時代なら可能かもしれないが、昔は無理だろう。その不可能な事態が起こった事によって、祟り神の存在が証明されてしまったのだ。

「一応言っておくけど、あくまで推理だから。絶対いたと証明出来たわけじゃないわよ」

第二十七話：御射軍神様の祟り？

「じゃあ、証明する方法は……」

「あるわよ」

そう言つて、蓮子さん帽子の中から古い本を取り出して、パラパラとめくり始めた。

「蓮子……まさか……」

「ちよつと借りてきただけよ……後で返すわ」

メリーさんは呆れ顔で、蓮子さんを見ていた。多分図書館かどこから盗んできたのだろう。

「……これを見て」

蓮子さんの見せてきたページはだいぶボロボロで文字を読むのも一苦労だった。

「このところに守矢神社つて書いてあるでしょ？そしてここに『本殿』つて書いてあるの」

蓮子さんの指差している所はだいぶ綺麗で簡単に読みとることが出来た。私は古文は苦手だが、現代語訳をすると、「本殿には御射軍神様がいらつしやつた」と書いてある。本殿にいたのは名前から想像するまでもなく、そのまま軍神だろう。

「御射軍神様……？どこかで聞いたことあるような……」

頬に手を当ててメリーさんが記憶の書庫を漁り始めた。

「『とある地域で御射軍神様と言われる崇り神を崇める所がある』
って言うフレーズだった気がするわ。たしかタイトルは……『消え
ゆく信仰心』だと思うわ」

その本なら私も知っている。別に宗教勧誘だとかそういうのではなく、とある教授が書いた真面目な本で、私も持っている。

「メリー、あの本読んだの？私なんか三ページでやめたわよ」

会話から判ると思うが、その教授は私の大学にいる。そんなことは置いといて、この本は証明するに十分な本だと思う。理由は長くなるから割愛するけど。

「蓮子には嫌いなジャンルだからね。どうする、もう証明には十分
だと思っけど」

「そっね……じゃあ、帰りましょうか」

「えっ？」

あの往生際の悪い蓮子さんが存在の証明だけで満足するなんて、雪
が降る可能性が高い。

「何驚いてるのよ。上見てみなさいよ上」

蓮子さんに言われた通り、上を見ると、真っ黒な雲が神社の上空だ
けに広がっていた。

「私達崇られたのかしらね」

メリーさんはのんきに笑っているが、私は十分怖い。

「じゃあ降られる前に帰りましょうか」

蓮子さんは帽子の中に本をしまつて立ち上がると、大きく伸びをした。

メリーさんは立ち上がった後、私の足を気遣ってくれたらしく、手を貸してくれた。

「あつ、先に行つててください。ちょっとやりたいことがあるんで石段を降りようとしていた二人にそう言った。

「じゃあ、下で待つてるわ」

二人が降りていくの見届けて、なんとか普通に歩ける程度にまで回復した私は百八十度方向転換して、だいたい本殿があつたであろう場所まで移動した。

「えーと、今日の私達の行動が御射軍神様を怒らせてしまったのなら、どうか許してください」

何も無い土地で深々と頭を下げる私を端から見れば馬鹿みただが、私は至って真面目だ。

私はポケットに入っていた数枚の小銭を前方に放り投げて、二礼二

拍手一礼をした。

「それでは今日はありがとうございました」

再び深々と頭を下げながら、二人の後を追いかけた。

石段を降りた後ふと見上げた雲は最初のように真っ黒ではなく、薄い灰色になっていた。御射軍神様の怒りが収まったのか、それともただの偶然なのかわからないが、なんとなく心配事がなくなった気がした。

第二十八話：教授

私とあの人達と出会ったのは基礎物理学の講義中だった。

基礎物理学の講師はだいぶ年をとったおじいさんだった。このおじいさんは早口、声が小さい、マイクを使わない、板書しない、テストが異様に難しいなどの理由でかなり嫌われ者だった。

過去形だからと言って、お亡くなりになったとか、そう言った話ではないのだけは理解して欲しい。

週が開け、一番最初の講義がこれだと理解して、少し憂鬱になるのはもはや慣れてしまった。

だけど、その日は違った。

基礎物理学の教壇に立ったのは、二人の女性だった。一人は赤い髪に赤い服、赤いマントと言った赤を強調した女性と、もう一人は金髪に水兵服と言ったややボーイッシュな女性だった。

事態を把握している者はいなかったらしく、ざわざわと室内は騒がしくなった。

「事態を把握してないのはわかるが、少し静かに。それについては今から話す」

赤い方の女性はマイクを手にとってそう言った。

「利根田はぎっくり腰になって、今は入院中だ」

そうか、あのおじいさんは利根田と言うのか、すっかり忘れていた。

「で、代わりと言っては何だが、私達が請け負う事になった」

女性は一旦、マイクを置いて、黒板に自分の名前を大きく書いた。

「私は岡崎夢美！職業は教授だ！名前を覚えにくいなら教授と呼んでくれ！そっちの方が慣れている！基本的には比較物理学を教えている！だが、お前等を十として、それに四十五を掛けて、七乗した値ほど、基礎物理学は理解している！以後よろしく！ちなみに年は十八だ」

教授は色々な事をさつさと述べたが、平然とすごい事をいくつも言っていた。

教授は隣の女性にマイクを手渡した。

「北白河ちゆりだ。年は十五歳。これでも、大学院は卒業している。私はこの馬鹿教授の助手をしている。以後よろしく頼んだぜ」

~~~~~

あんな破天荒な自己紹介をした教授だが、教授の講義は驚くほどわかりやすかった。どんな質問も快刀乱麻に答えてくれる。基礎物理学を楽しいと思っただのは初めてかもしれない。

「それじゃあ、ここら辺で終わりだ。ああ、忘れる所だった。この中でオカルトサークルに所属している奴。ちよっと私の所に来い」

秘封倶楽部はたしかオカルトサークルだったからここは行かないと  
いけないのかな？

筆記用具を片付けて、教授に言われた通り前に向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8669m/>

---

秘封倶楽部活動記録

2011年10月7日16時08分発行